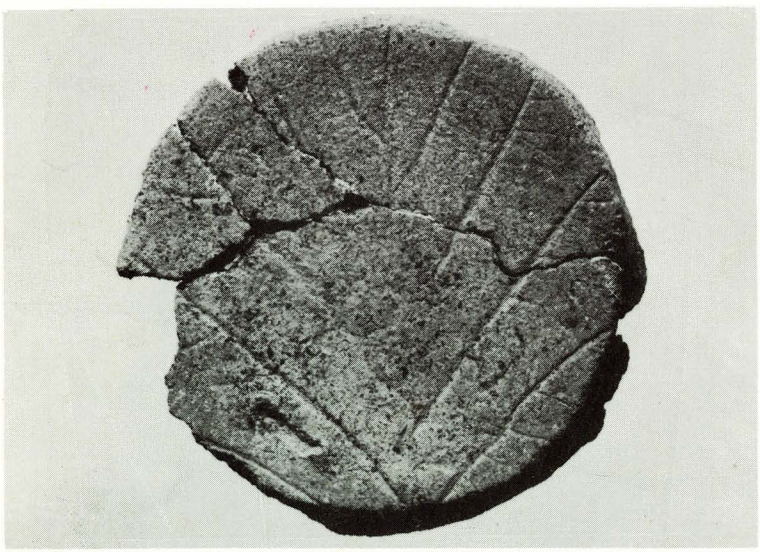
山根遺跡の発掘

高知県吾川郡春野町

岡本健児
宅間一之
山本哲也



（大篠式土器木葉文底部）

春野町教育委員会

昭和56年3月31日

序

春野町秋山山根の発掘調査は、昭和48年・49年・50年・51年と４次にわたって実施されましたが、今回のこの調査は、地方改善施設整備事業の地区道秋山石丸２－２号線の、拡巾工事に伴うものでした。

調査は、小島正隆前教育長を団長として、高知女子大教授岡本健児、県文化振興課宅間一之、山本哲也の諸先生によって実施され、町の文化財保護審議会委員をはじめ、埋蔵文化財に関心をもつ、町内の有志の方々、高知大生、町教委、同対職員、それに工事関係者の秋森興業のご協力により、予期した成果を挙げることができました。

調査の結果、縄文時代後期から、室町時代にかけての人々の生活が解明され、岡本、宅間、山本の諸先生の全面的なご協力により、調査報告書を刊行することになりました。

諸先生方をはじめ、この調査に特にご協力いただきました皆様に、深く感謝を申し上げます。

この報告書が考古学上の貴重な参考資料として活用されますとともに、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じております。

昭和56年３月31日

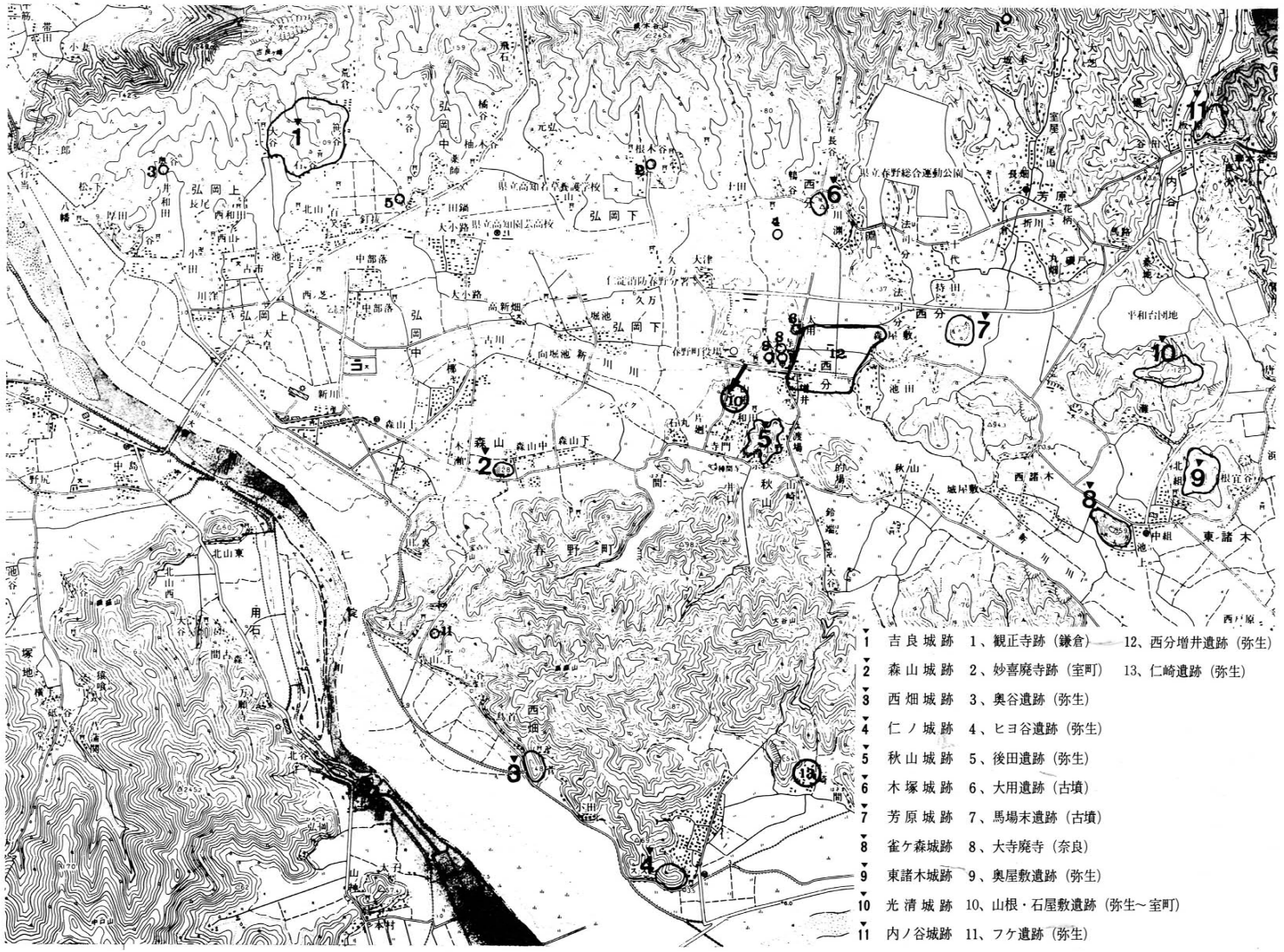
春野町教育長　前　田　邦　夫

目　　次

序
1、はじめに…… 1
2、調査の概要…… 2
Ⅰ、調査の方法…… 2
Ⅱ、Aトレンチ…… 2
Ⅲ、Bトレンチ…… 3
Ⅳ、C・Dトレンチ…… 4
Ⅴ、まとめ…… 5

第1図　トレンチ配置図
2　Aトレンチ遺物出土状況
3　Aトレンチ層位図
4　Bトレンチ竪穴住居址検出状況
5　Dトレンチ遺物出土状況
6　Dトレンチ層位図

PL1　発掘前の状況Aトレンチ全景
PL2　Aトレンチ遺物出土状況
PL3　Aトレンチ遺物出土状況
　　Aトレンチ東壁砂礫層位
PL4　B・C・Dトレンチ発掘前の状況
　　Bトレンチ発掘状況
PL5　Bトレンチ住居址出土状況
PL6　Bトレンチ住居址内炉跡及び遺物出土状況
PL7　Bトレンチ遺物出土状況
PL8　Bトレンチ南壁及び西壁層位
PL9　Dトレンチ全景及び遺物出土状況
PL10　Aトレンチ出土の津雲A式土器
PL11　Aトレンチ出土の津雲A式土器・石錘・獣骨片
PL12　Aトレンチ出土の西見当Ⅱ式土器・大篠式土器・凹石
PL13　Bトレンチ出土遺物
PL14　Bトレンチ出土大篠式土器
PL15　Bトレンチ出土石器
PL16　Bトレンチ出土木葉底、及び指頭圧痕の土器底部
PL17　Cトレンチ出土遺物
PL18　Cトレンチ出土の馬場末式土器



春野町内周知の埋蔵文化と包蔵地図

1、はじめに

高知県吾川郡春野町には、周知の埋蔵文化財包蔵地として、弥生遺跡８、古墳時代遺跡２、寺院跡３、中世城跡11の24地点が確認されている。このうち発掘調査等による調査が実施された遺跡は、山根・石屋敷遺跡、馬場末遺跡、後田遺跡、大用遺跡、竹ノ内（西分増井遺跡内）遺跡の５箇所である。

山根・石屋敷遺跡は、昭和48年10月、49年２月、50年３月、51年３月の４次にわたる学術調査と本年７月の緊急発掘調査を含めて５次にわたって実施された。この結果縄文後期中葉から室町時代にかけての人々の生活の跡が裏付けられた。１次～４次にわたる調査成果についてはすでに報告されている。

馬場末遺跡については、昭和49年８月、大寺廃寺跡の確認もかねて実施された。しかし大寺廃寺についての確認は不可能であったが、多量の土師器が出土し、「馬場末式土器」のタイプサイトとされた。

後田遺跡については、昭和48年５月、工場造成中付近の前田和功君の発見により、昭和48年10月発掘調査が実施されたが、遺構の確認までにいたらず終了した。

大用遺跡についても、昭和52年３月家屋新築工事に伴う緊急発掘調査を実施したが、若干の遺物を採集しただけであった。

西分増井遺跡の南端に位置する竹ノ内は、昭和52年３月実施され、弥生末期の土壙墓と、４世紀初めの竪穴住居址を確認している。

その他の遺跡については、すべてが表面採集の結果に基いて散布地として登録されたものであり今後その範囲等についても確認する必要がある。

中世城跡についても、文献や伝承により一応把握はされているが、遺構の実測や発掘調査はどの城跡もなされていない。ただ吉良城跡の南嶺と北嶺（詰の段）の面積測量は実施されており、芳原城跡からは備前擂鉢口縁編年のⅢ期に属するもの、禾目天目茶わん片など100片余の遺物が表採されている。

寺院跡についても、郡衙関係の寺院ではと推定され多量の瓦を出土する大寺廃寺跡や、数多くの伝承につつまれ、瓦質土器や土師質土器が出土する観正寺跡なども所在するが、考古学的な調査の実施にはまだかなりの時間を要するであろう。

高知県吾川郡春野町秋山山根遺跡のごく１部の発掘を昭和55年の７月23日から８月２日まで実施した。

この発掘は、昭和54年度地方改善施設整備事業として、春野町秋山石丸２－２号線の拡幅に伴う緊急発掘調査である。

調査は、「山根遺跡発掘調査団」を組織した。

団　　長　小島正隆　（春野町教育長）

顧　　問　岡本健児　（高知女子大学教授）

調 査 員　宅間一之　（高知県教育委員会文化振興課）

山本哲也　（　〃　）

調査補助員　山脇正確、池上高雄、小島岸江、森岡静子、中山雅雄（教育委員会）

山本具、尾崎誠一郎、前田博人、高橋富士夫、田内照茂、（同和対策室）

春野町文化財保護審議会委員

高橋英男、岡村昭子、森　義典、小島利江、

豊福由恭佳、山田幸弘、尾崎　淳、石井　勇（高知大生）

協 力 者　有限会社秋森興業

報告書作成にあたっては、1、宅間一之、2（Ⅰ～Ⅴ）、岡本健児が執筆し、製図は山本哲也、写真と編集は宅間一之が担当した。

2　調　査　の　概　要

Ⅰ．調査の方法

発掘は道路拡幅分のなかで、特に遺跡として充分に確認できる地点を調査団で決定して行った。その結果、第1図にみるような4つのトレンチの発掘区を定めた。この場合、Aトレンチ・Bトレンチは昭和48年から昭和51年までの4次に及ぶ山根・石屋敷遺跡の発掘の経験から、前期弥生関係の遺構ないし遺物の発掘を期待して設定した。Cトレンチ・Dトレンチ(註)は、これも先の発掘の経験から弥生後期の遺構ないし遺物の発見を期待して設定した。この設定は結果的にそれに近い発見となった。

（註）　岡本健児・廣田典夫『山根・石屋敷遺跡付馬場末遺跡』春野町教育委員会刊・昭51

Ⅱ　Aトレンチ

Aトレンチは1.5×10ｍで設定したが、道路が大きく湾曲しているために、、トレンチ自体もやや湾曲している。（第2図）トレンチ上部には旧民家があったため発掘は困難であったが、下層部は砂層であったため掘りやすかった。Aトレンチの層位は第3図・第4図を参照していただきたい。このAトレンチの層位は従来発掘した各地区の層位とは全く異っている。そしてこのAトレンチで遺物を多く含む層は、6層の黄茶色砂質層である。この層は発掘報告書で示したかつての第6層の黄褐色の砂層または砂礫層に該当する。そしてこの黄褐色の砂層または砂礫層(註)からは縄文後期中葉の津雲A式（南四国では三里式）土器とそれに伴なう石錘が出土したが、それと同様に今回発掘したAトレンチ第6層（黄茶色砂質層）からも多くの津雲A式土器片と2個の石錘・1個の獣骨片が発見された。（PL．2・3・10・11）なおAトレンチで注意すべき事は、第3図のAトレンチ東

壁断面図にある第６層の中央部の砂礫層がはさまれたような状況で存在するが、この砂礫層を境として北部の第６層からは津雲Ａ式土器片のみが、その南部の第６層からはごく少量の弥生前期中葉の西見当Ⅱ式土器片（ＰＬ．12）が津雲Ａ式土器片と混在して発見された。

このＡトレンチ第６層については細心の注意で発掘したが、遺構は存在しなかった。結局この層は先の調査によって発見された第６層と同様に洪水によって運ばれた砂層であり、遺物は洪水によって２次的に堆積したものであると把握してよくはなかろうか。山根の小山丘の南面する舌状部の先端にあった縄文後期中葉の遺跡と、舌状部のやや後方にあった弥生前期中葉の遺跡を大洪水による水流がこわして作ったのが、このＡトレンチの第６層であり、先に調査した第６層なのである。

この第６層を作った大洪水は先の報告書では縄文時代後期中葉以後の縄文時代と考えたが、今回の第６層からの弥生前期中葉の西見当Ⅱ式土器の発見から、弥生前期中葉における大洪水としなければならなくなった。

なお参考までにＡトレンチでは地表下1.6ｍ程度で後期縄文土器が出土するが、先に調査したＡトレンチ東部の調査区では地表下2.2ｍで後期縄文土器が出土する。また第６層の砂質層ないし砂層は、山根遺跡の西側が東側の部分よりもその層の厚さが薄くなっていて、このＡトレンチはその西限に近いという感を持たせた。

Ａトレンチの第２層の褐色粘質層からは中世末の少量の土師質土器が出度し、第３層の暗灰色粘質層からはヒビノキⅢ式土器（古墳時代初頭）の細片が２片程発見されている。第５層の黄灰色粘質砂層からも少量の中期および前期末の土器片と凹石（ＰＬ、12）が発見されている。

（註）Ⅰの註に同じ

Ⅲ　Ｂトレンチ

Ｂトレンチは２ｍ×4.5ｍで設定した。層位は第４図を参照いただきたい。第２層と第３層に掘り込まれた茶褐色粘質土層の小ピットは、その底部から近世後半の燈明皿が出土している事によって、近世後半期の掘り穴である事が判明した。第３層の暗茶褐色粘質土層は有機土層であって、中世の遺物を包含する。この中世の遺物は糸切底の土師質小皿、高台のつたい土師質坏、伊部焼破片であった。（ＰＬ．13の１～３）

第５層の暗灰茶色粘質砂層は、その厚さ約60㎝であるが、その上部に黒い有機質混入のバンドの部分があった。このバンド中から、ごく少量であるが弥生後期後半のヒビノキⅡ式土器片（ＰＬ．13の４）が発見されている。

このＢトレンチの下層部から竪穴住居址の１部が発見された。この竪穴住居址（第４図）は第８層を掘り凹め、第９層の暗茶褐色粘質土層を床面と壁面にしている。壁面の床面からの立ち上がりは10～18㎝程度である。このような壁面の立ち上がりの低いのは、本遺跡で先に発見された竪穴住居址もそうであったし、高知県下で発見された弥生・古墳時代住居址の大半もそうである。(註)

第８層の灰茶褐色粘質層は遺物包含層であって、今回の発掘におけるこの層の遺物のほとんどは

弥生前期後半の大篠式土器片とそれに伴なう石器群に限定された。ただその大篠式土器群に混ざって１片の縄文後期中葉の津雲Ａ式土器片と３片の弥生中期前半の田村式土器片が混入していた。（ＰＬ．13）

竪穴住居の１部に径40cmの真黒い炭化物の堆積した炉址が発見された。床面からは多くの大篠式土器片（ＰＬ．14）が発見された。住居址外の地点からも、多くの炭化物・大篠式土器片・太形蛤刃石斧（結晶片岩製）・砥石（砂岩製および粘板岩製）（ＰＬ．15）が発見された。これらの遺物の発見は住居址より北に２ｍ以内の地点である。２ｍを離れると遺物の発見はほとんどみられなくなる。なお住居址内外からの大篠式土器の底部は、13個体分発見されている。うち大形の１個は木葉底であり、１個は内部に指頭圧痕がはっきりみられるものである。（ＰＬ．16）また13個体のうち丹彩のものは１個にすぎなかった。

また従前の発掘で発見された竪穴住居址は、地表面下1.1ｍの深さにあったが、今回のものは先述したように地表面下2.2ｍの深さである。さらに住居址の存在した層およびその直下の層は、今回も従前もともに同じ粘質の層であるが有機土の含有量の多少によって、その色調をやや異にしている。

（註）Ⅰの註に同じ

Ⅳ　Ｃ・Ｄトレンチ

Ｃトレンチは２ｍ×2.4ｍの発掘区を設定した。しかしこの地区は民家の下水道が通っていた関係で攪乱もはげしく、また湧水もはげしいため深さ70cm程度まで掘り下げただけである。深さ70cmの所より弥生中期末の龍河洞式土器片が１片発見されている。（ＰＬ．17（上）１）層位は表土層、第２層茶褐色粘質層、第３層茶灰色粘質層となっている。第３層上層からは平安時代後半の底部篦削りの土師器杯がいくつか発見され、（ＰＬ．17（上）２）第３層下層からは古墳時代中葉の土師器（馬場末式土器）片が出土している。龍河洞式土器片は第３層下層に混入していた。

Ｄトレンチは２ｍ×4.2ｍにわたって発掘した。発掘区の層位は第６図を参照されたい。表土層の下に攪乱層である茶褐色粘質層があるのはＡトレンチ・Ｃトレンチなどと同様である。この２層の下に発掘区の大半を占める掘り込みが発見された。この掘り込みは南北径3.6ｍ以上のもので、黄茶色小礫層と茶褐色礫層の２つの層からなっている。この礫層含む２つの層はどこからか運ばればれたもので、この掘り込みを埋めたものである。この茶褐色礫層のなかから２片の藩政後期の伏見人形片（発掘されたものは犬の脚先の部分）が出土した事（ＰＬ．17（下）３、４）から、この掘り込み(註1)は江戸時代後半に作られ、あるいは墓地であった可能性もある。またこの落ち込みの中には、少量の備前焼と馬場末式土器片もみられた。

Ｄトレンチの北部にのみ馬場末式土器片が群集して発見されたが、遺構は発見出来なかった。茶灰色粘質層がこの馬場末式土器（ＰＬ．18）片を含む層であるが、その上部には中世遺物を含んでいて、備前擂鉢破片（ＰＬ．17、（下）１、２）も発見された。また藩政後期に掘られた落ち込み

の下には非常に薄く黄灰色粘質層が残っていて、非常に散発的であるが、馬場末式土器が発見された。

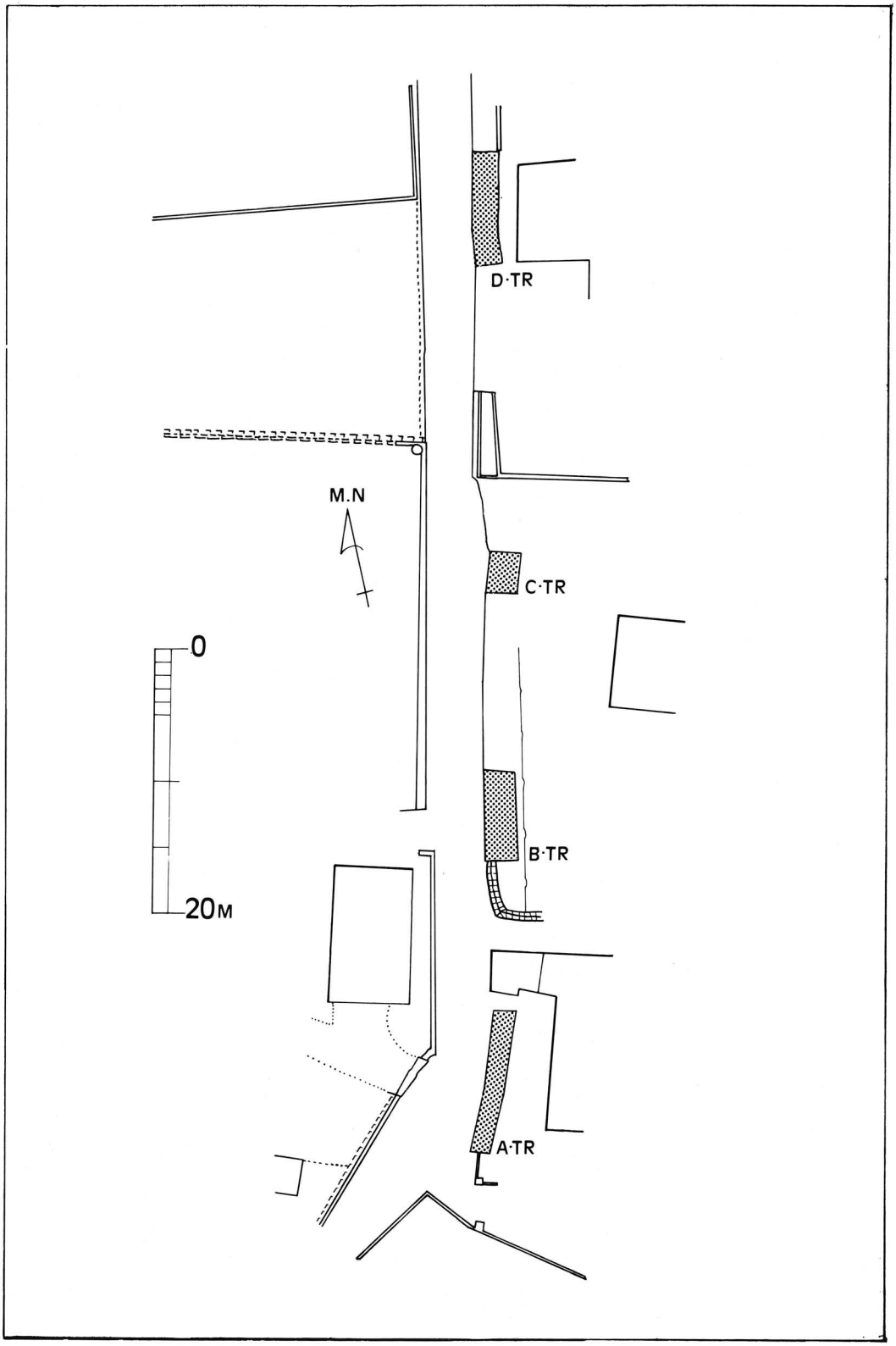
Dトレンチの発掘の結果と先の数次にわたる調査の結果とを合わせて、山根遺跡の北辺には弥生後期末から古墳時代中葉までの包含層が広く分布する事(註2)が判明した。

註1、岡本桂典「土佐・吹越近世墓」考古学ジャーナルNo.182 昭55

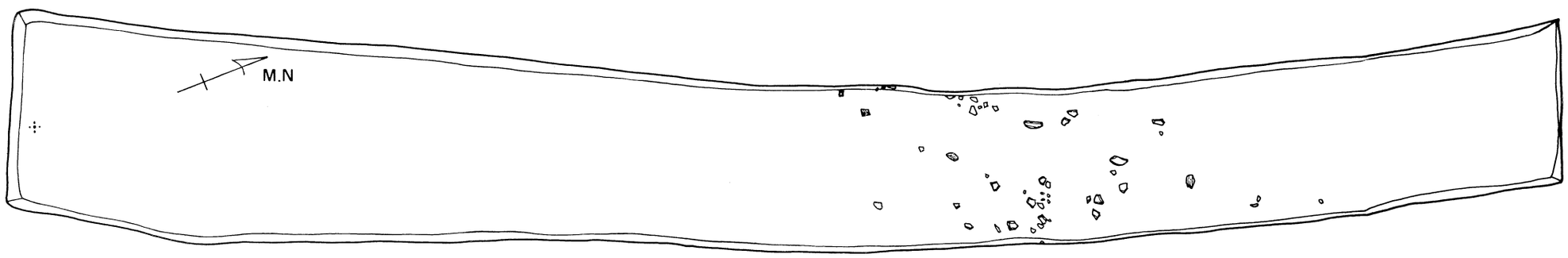
註2、Ⅰの註に同じ

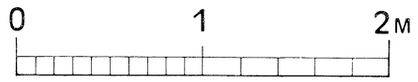
Ⅴ、まとめ

以上の山根遺跡の道路拡張に伴なう発掘を、われわれは山根・石屋敷遺跡の第5次調査と呼びたい。この第5次の調査によって遺構の検出されたのはBトレンチである。このBトレンチの竪穴居居址の発見によって、弥生前期後半の住居址群は、秋山山根の川島良水氏宅地内と川島千鶴子氏宅地内にかけて存在することが判明した。そしてこれらの遺構群は地下1.1m～2.2mの深さに存在するために、破壊されずに残存しているのである。しかしこれよりも深く埋蔵されている縄文後期中葉の津雲A式土器の遺構はほとんど残っていない。これはこれら縄文後期中葉の遺構が大洪水による破壊を受けたためである事は先の報告書でも述べたところである。

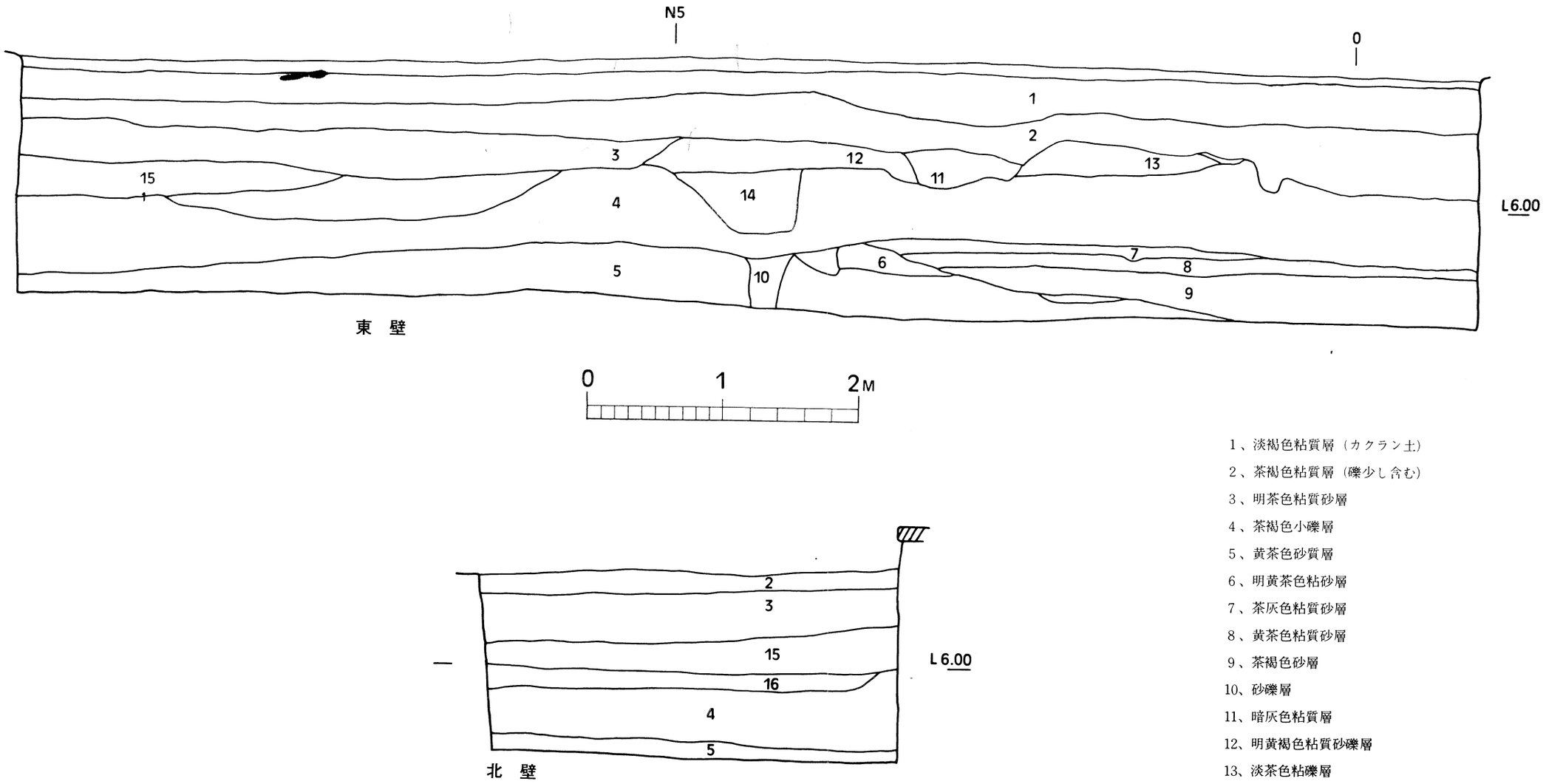


第1図　トレンチ配置図



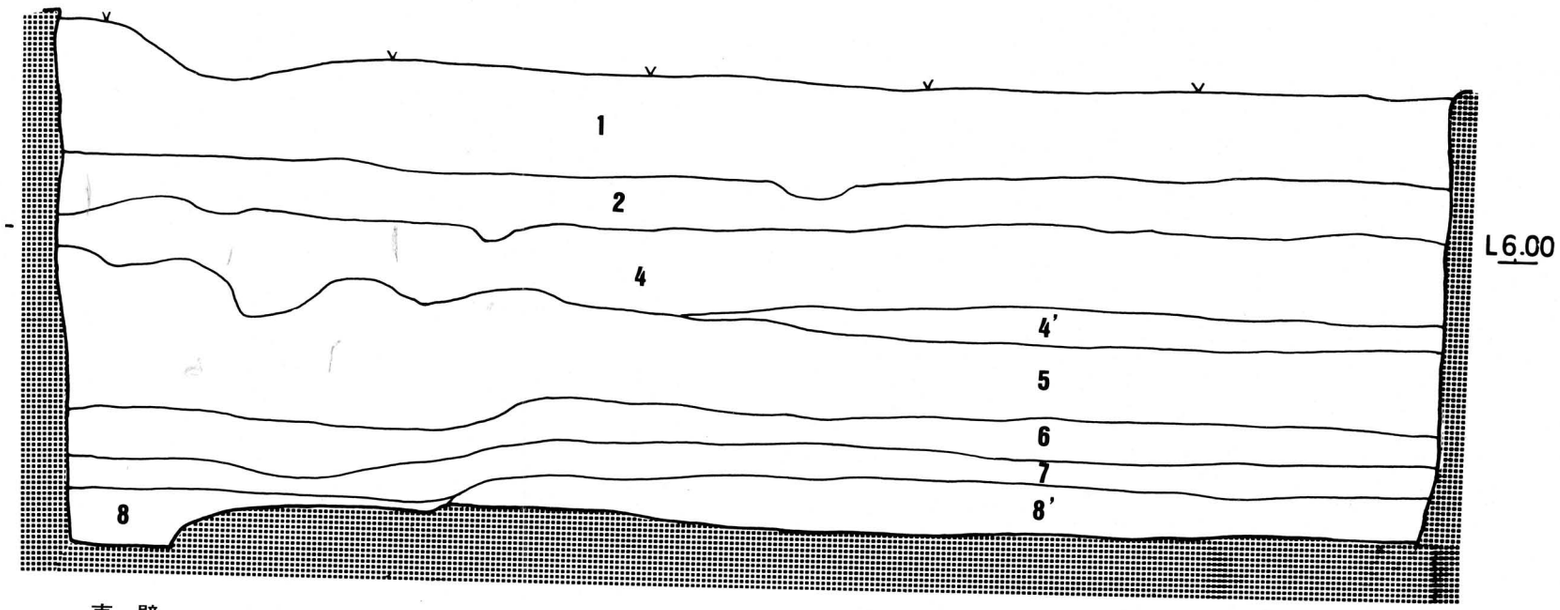


第2図　Aトレンチ遺物出土状況

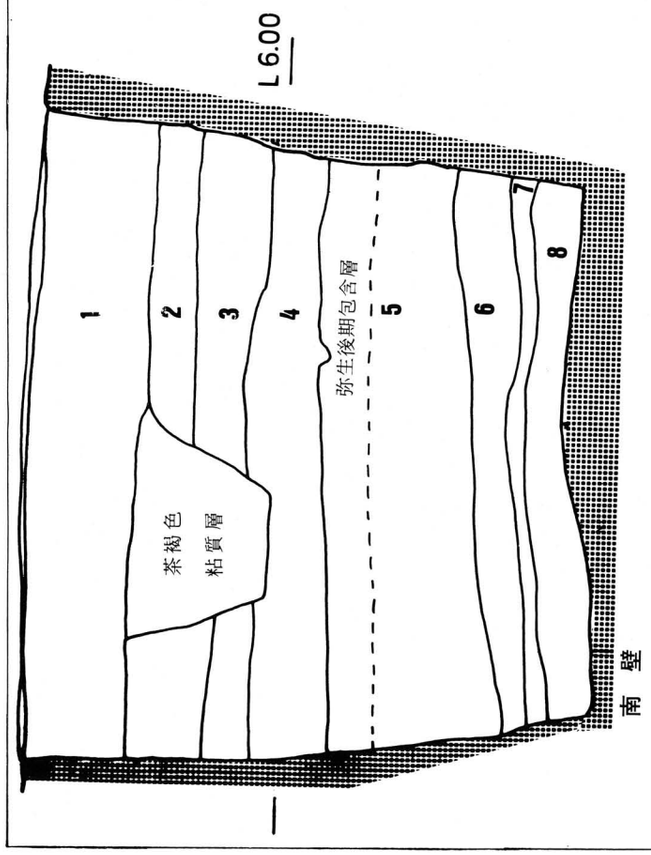


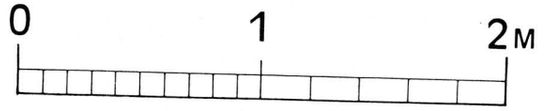
1、淡褐色粘質層（カクラン土）
2、茶褐色粘質層（礫少し含む）
3、明茶色粘質砂層
4、茶褐色小礫層
5、黄茶色砂質層
6、明黄茶色粘砂層
7、茶灰色粘質砂層
8、黄茶色粘質砂層
9、茶褐色砂層
10、砂礫層
11、暗灰色粘質層
12、明黄褐色粘質砂礫層
13、淡茶色粘礫層
14、黄茶褐色礫層
15、茶褐色粘質層
16、褐色粘礫層

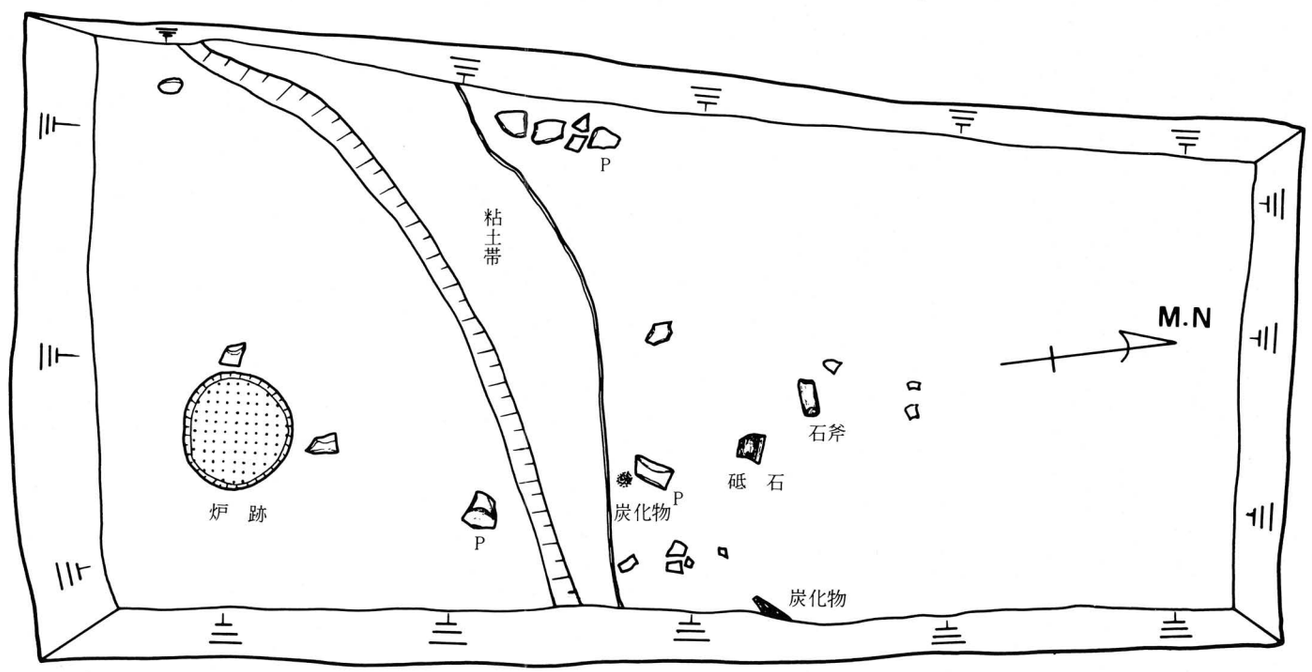
第３図　Ａトレンチ層位図



東　壁

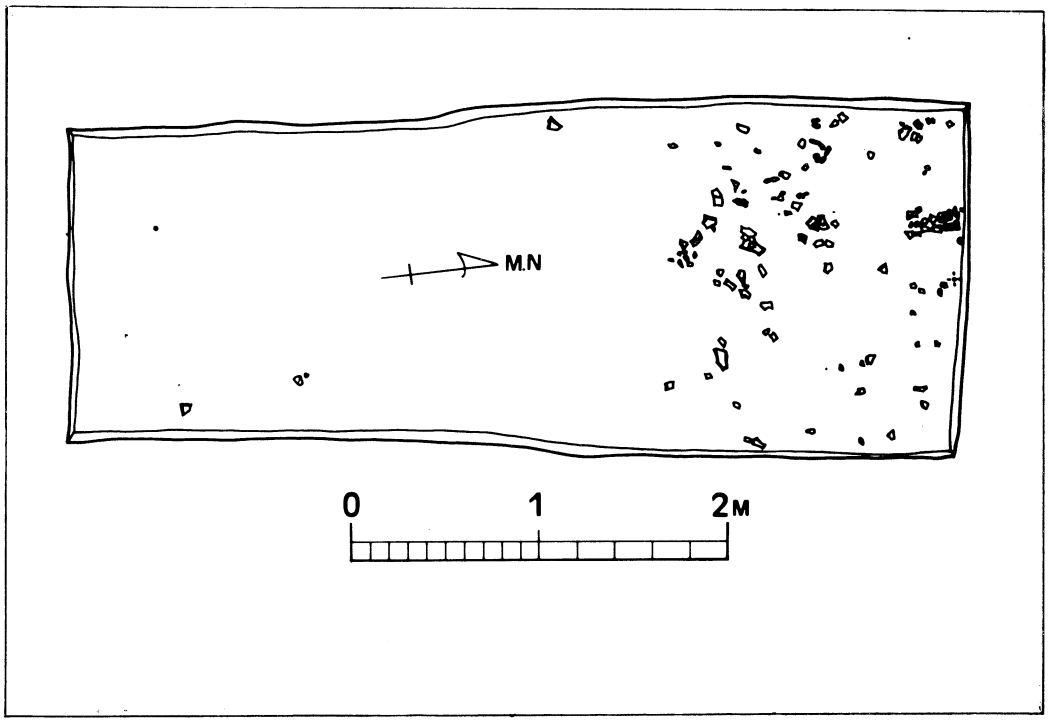




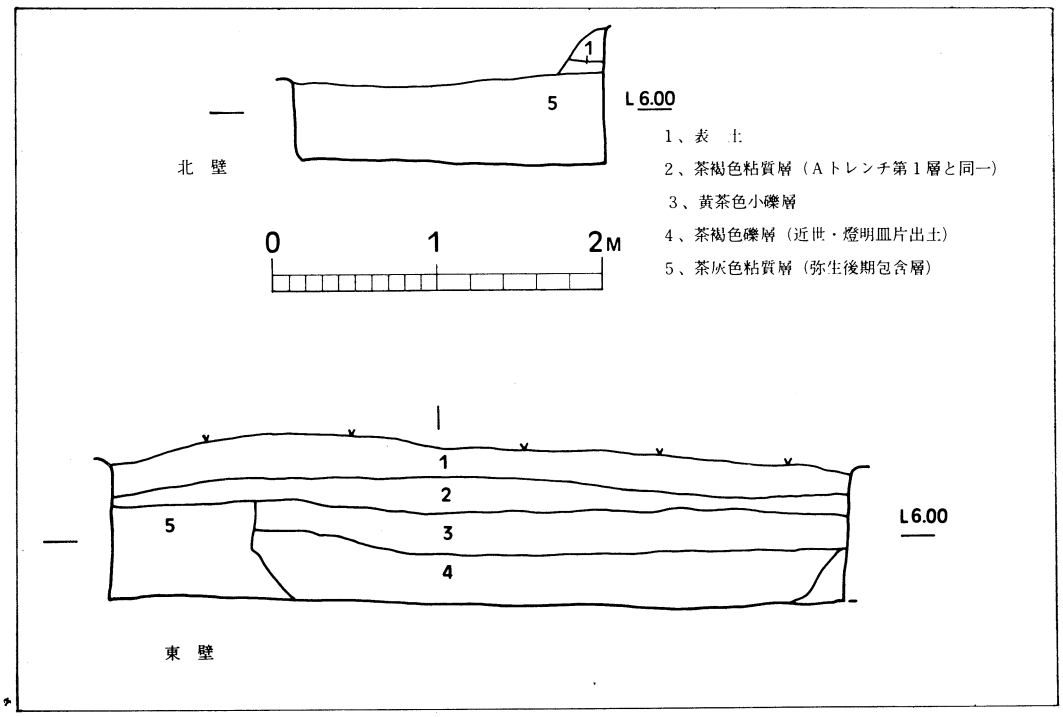


1、表　土
2、灰茶褐色粘質層
3、暗茶褐色粘質層
4、黄灰褐色粘質層
5、暗灰茶色粘質砂層
6、黄灰色粘砂層
7、黄茶色粘質層
8、灰茶色粘質層
8、茶褐色粘質層

第4図　Bトレンチ竪穴住居址検出状況

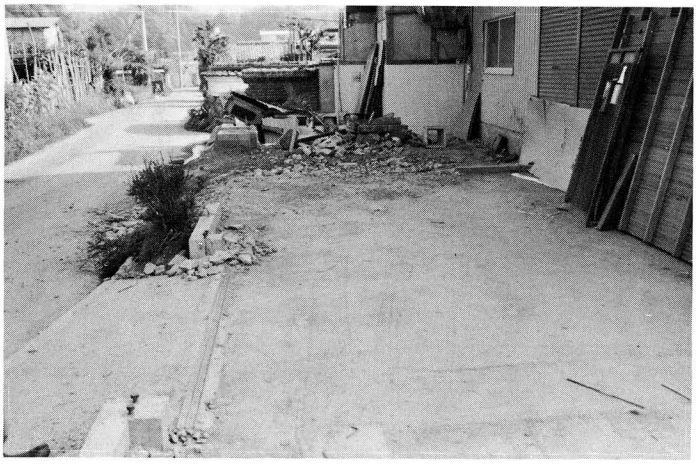


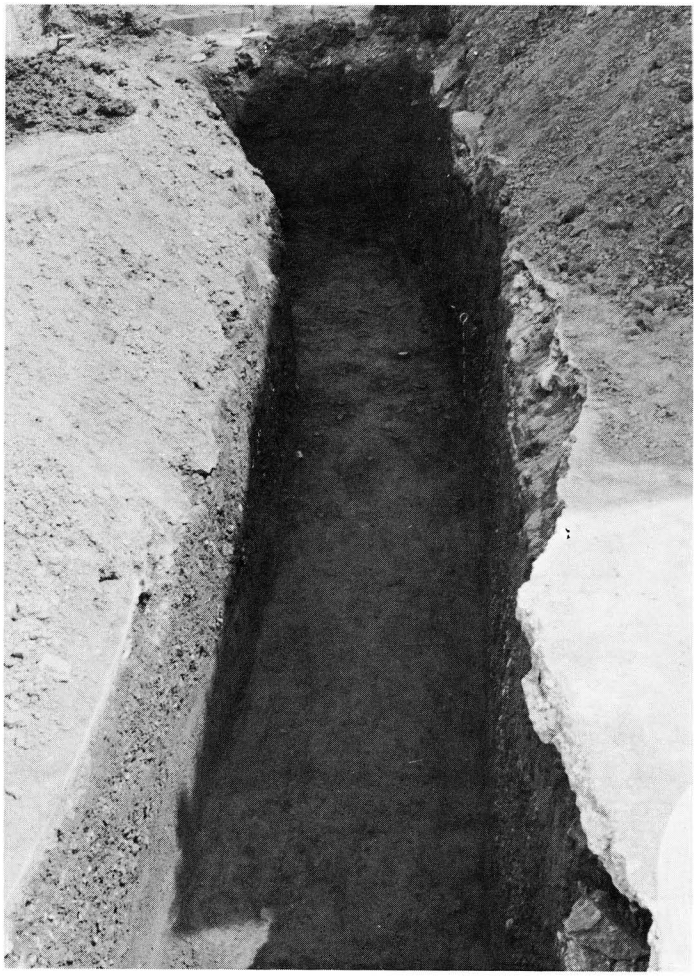
第5図　Dトレンチ遺物出土状況



第6図　Dトレンチ層位図

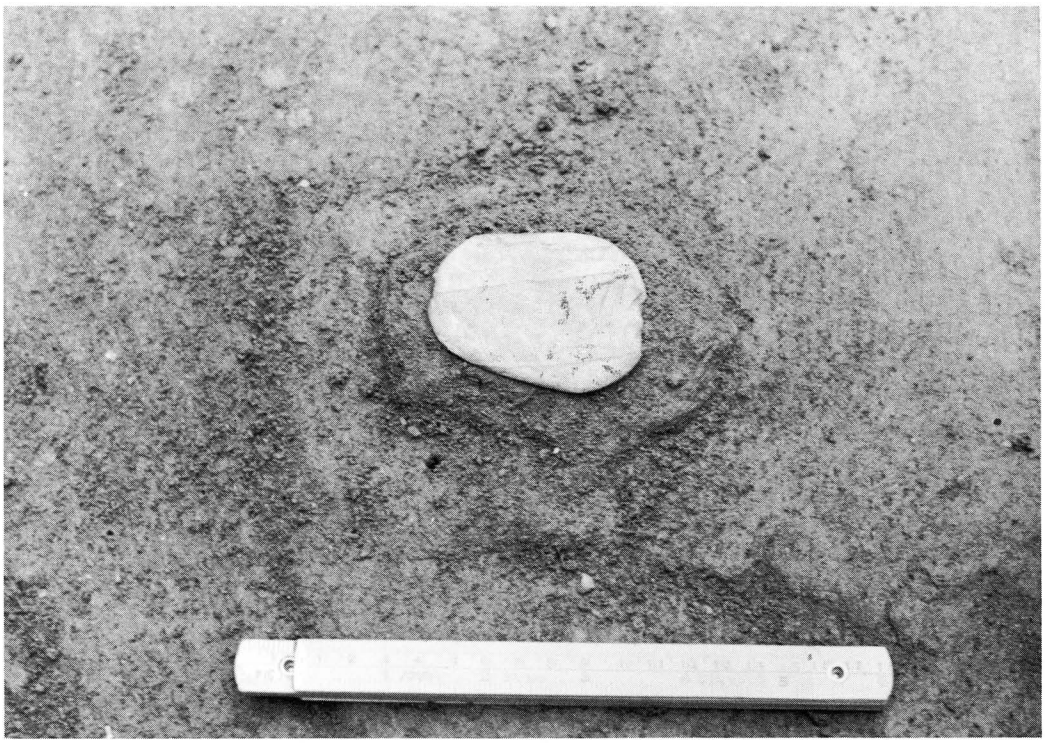
PL. 1





発掘前の状況及びＡトレンチ全景

PL. 2



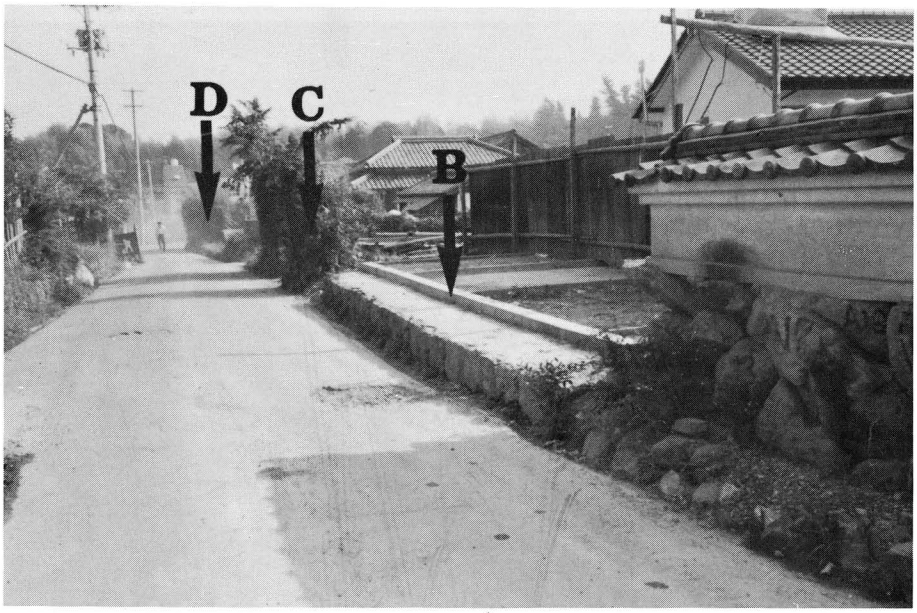
Aトレンチ遺物出土状況

PL. 3

Aトレンチ遺物出土状況

Aトレンチ東壁砂礫層位

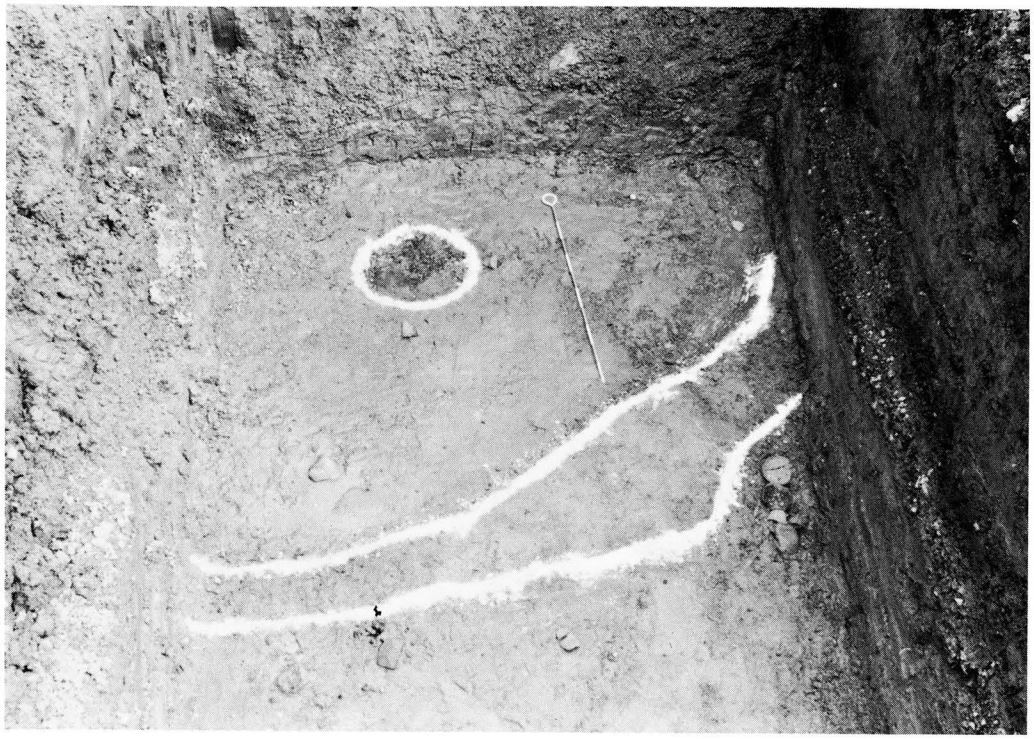
PL. 4



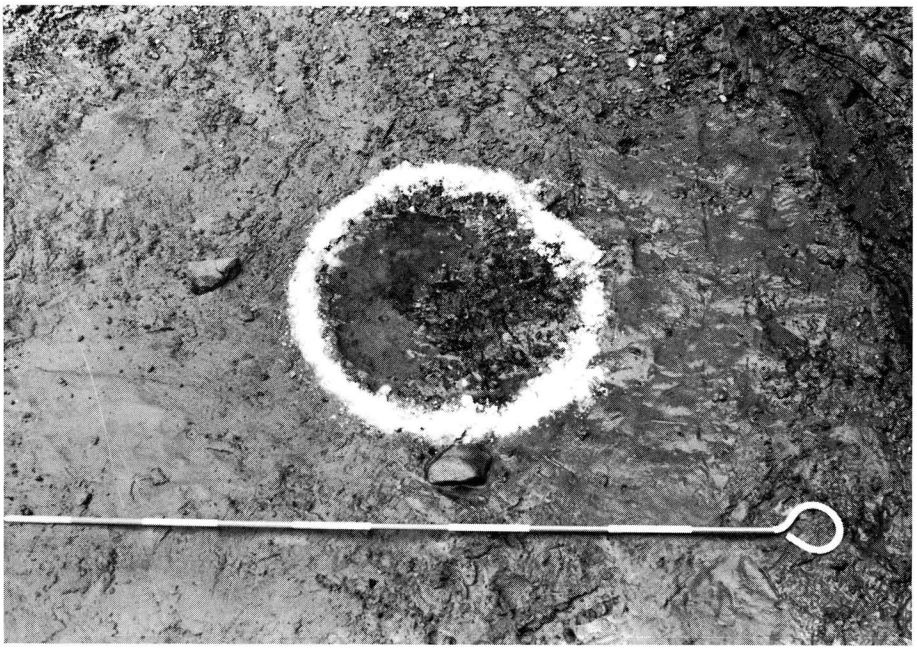
B、C、Dトレンチ発掘前の状況

Bトレンチ発掘状況

PL. 5



Bトレンチ住居址出土状況



Bトレンチ住居址内炉跡

Bトレンチ遺物出土状況

PL. 7

Bトレンチ遺物出土状況

PL. 8

Bトレンチ南壁層位

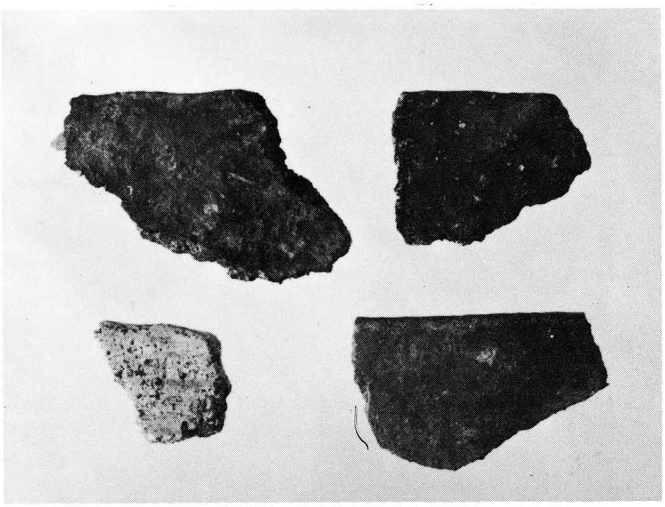
Bトレンチ西壁層位

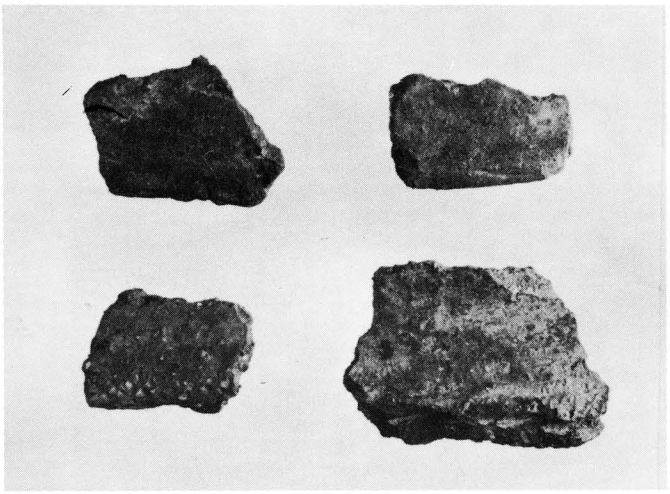
PL. 9

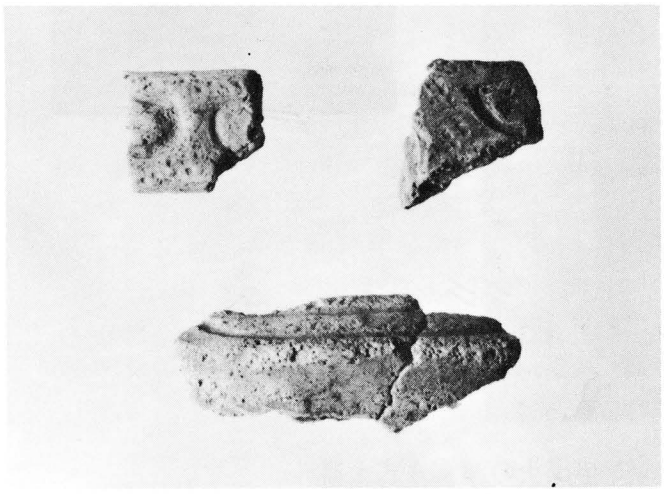
Dトレンチ全景

Dトレンチ遺物出土状況

PL. 10

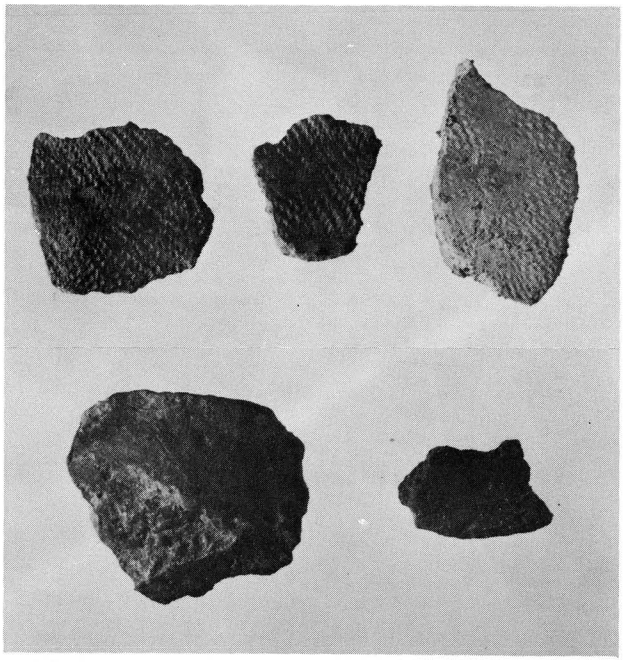


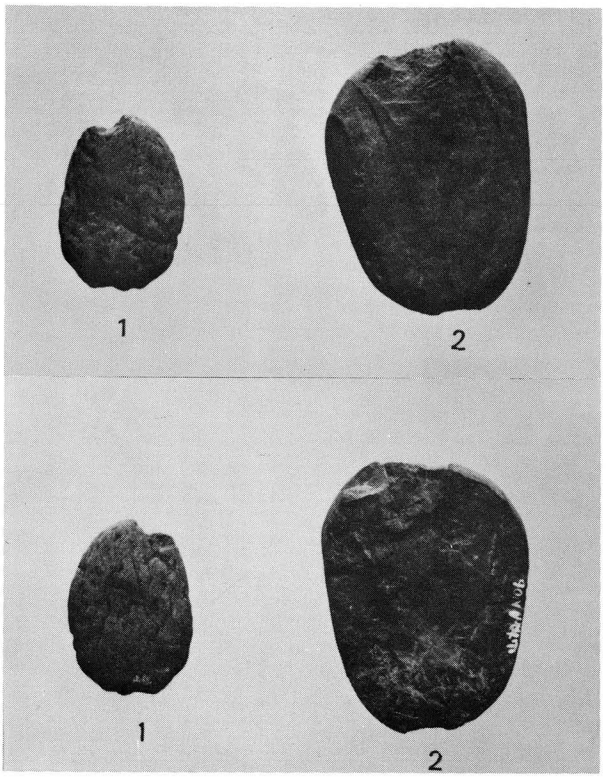


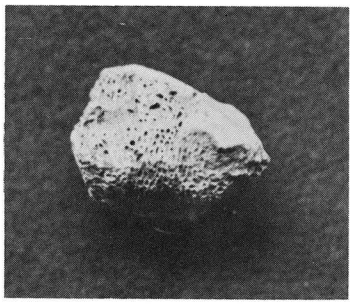


Aトレンチ出土の津雲A式土器（½大）

PL. 11

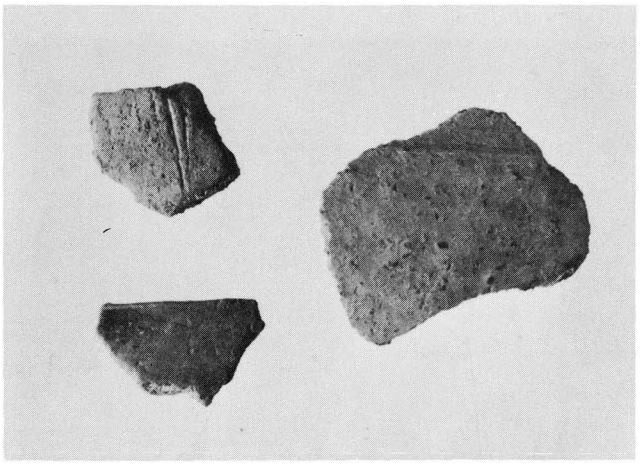


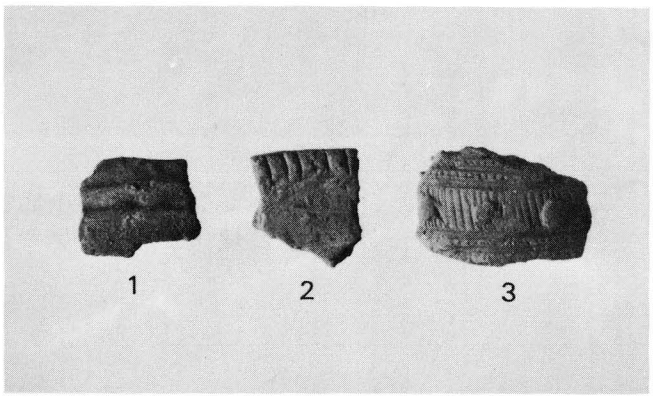


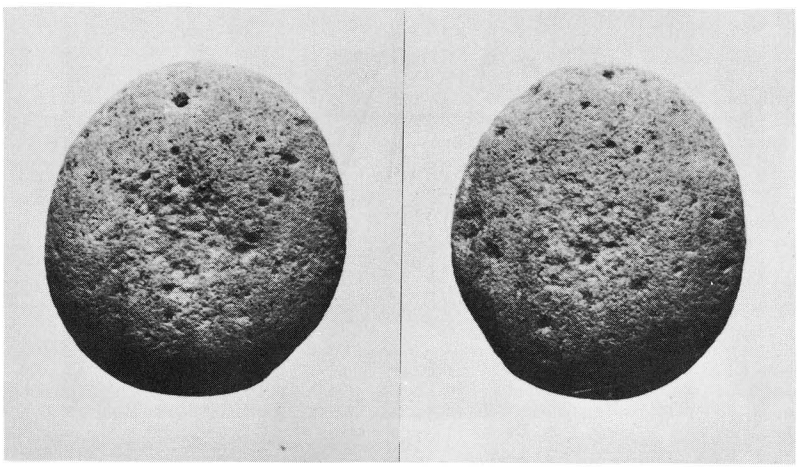


Aトレンチ出土の津雲A式土器、
石錘、(½大) 獣骨片

PL. 12

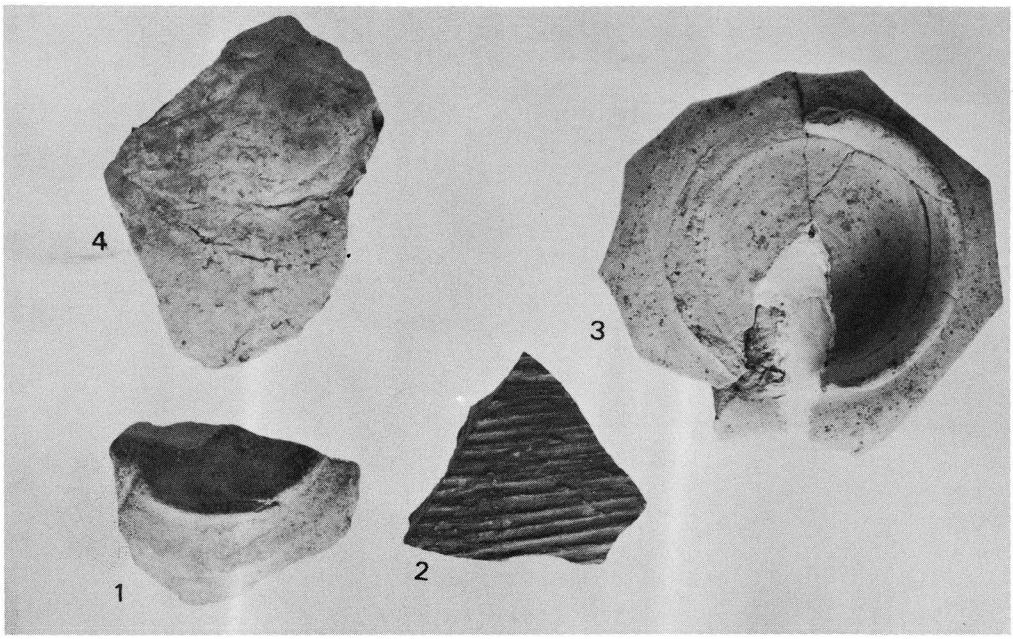




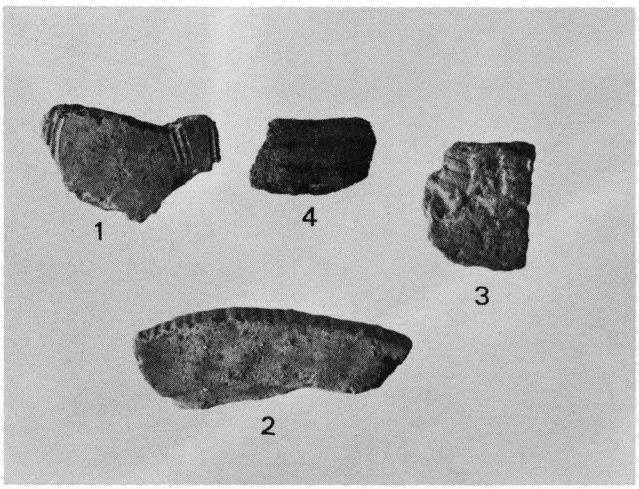


Aトレンチ出土の西見当Ⅱ式土器片（上）
大篠式土器片（中）
凹石（下）（$\frac{1}{2}$大）

PL. 13

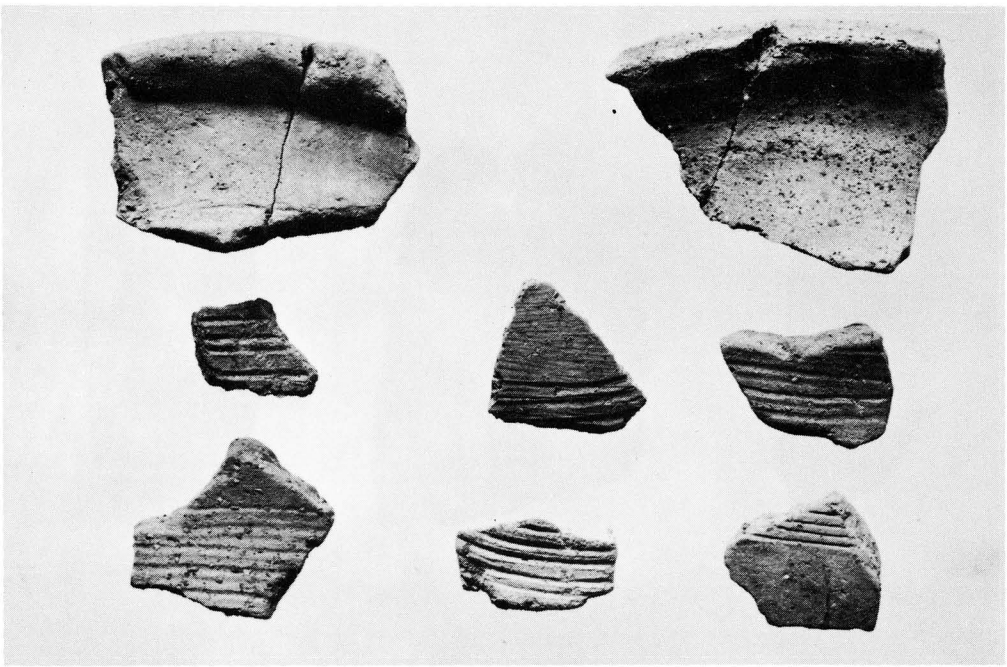


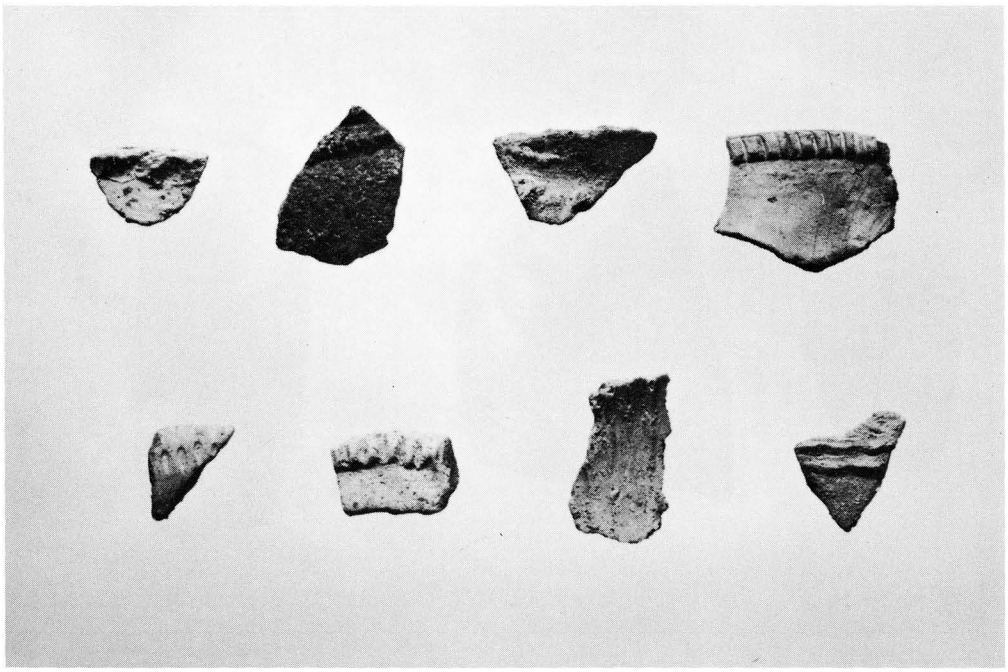
Bトレンチ出土の土師質土器（1、3）
伊部焼（2）ヒビノキⅡ式土器（4）



Bトレンチ出土の田村式土器片（1、2、3）
津雲A式土器片（4）

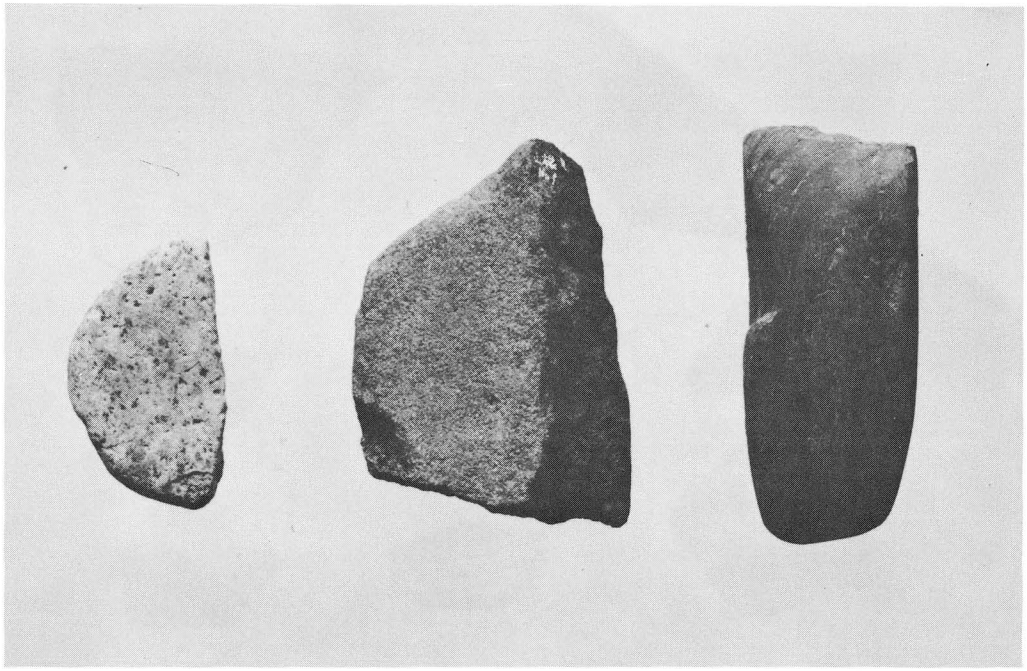
PL. 14

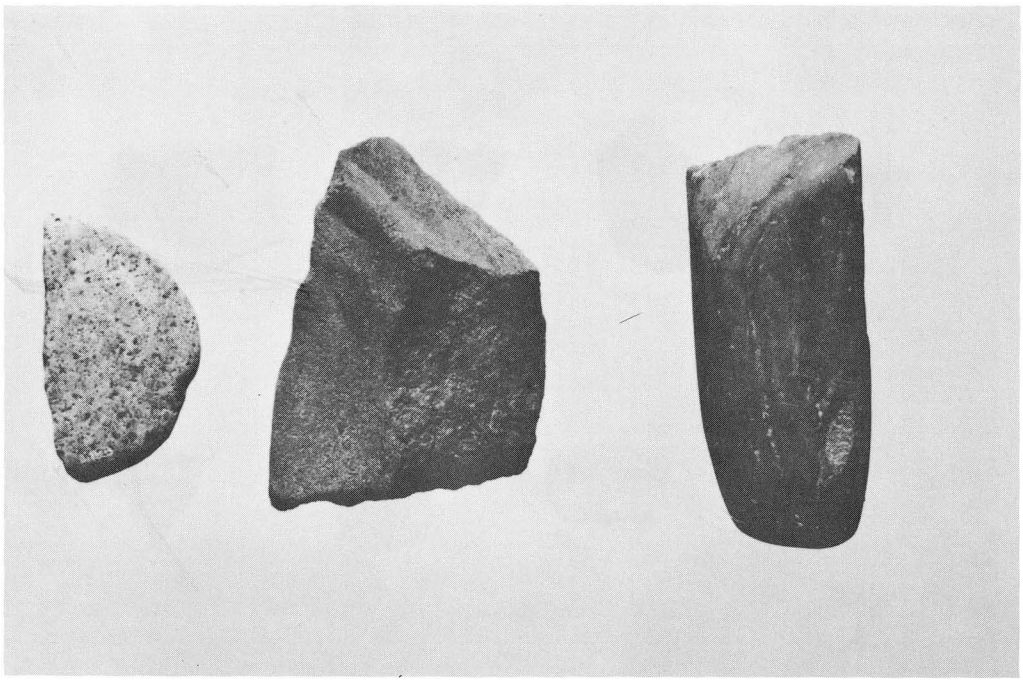




Bトレンチ出土大篠式土器片（½大）

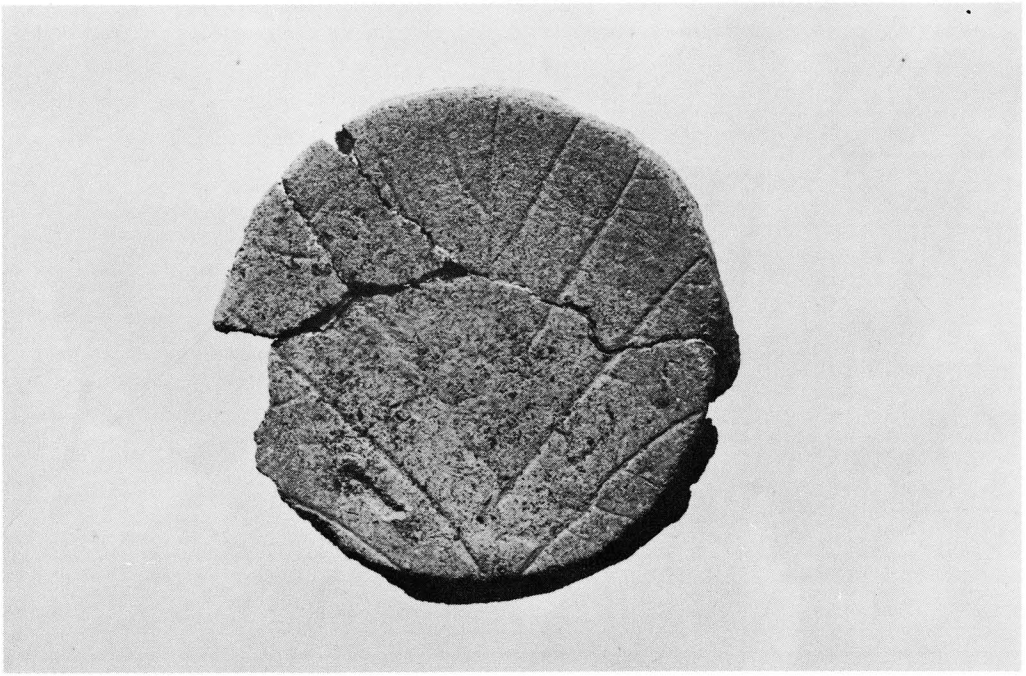
PL. 15

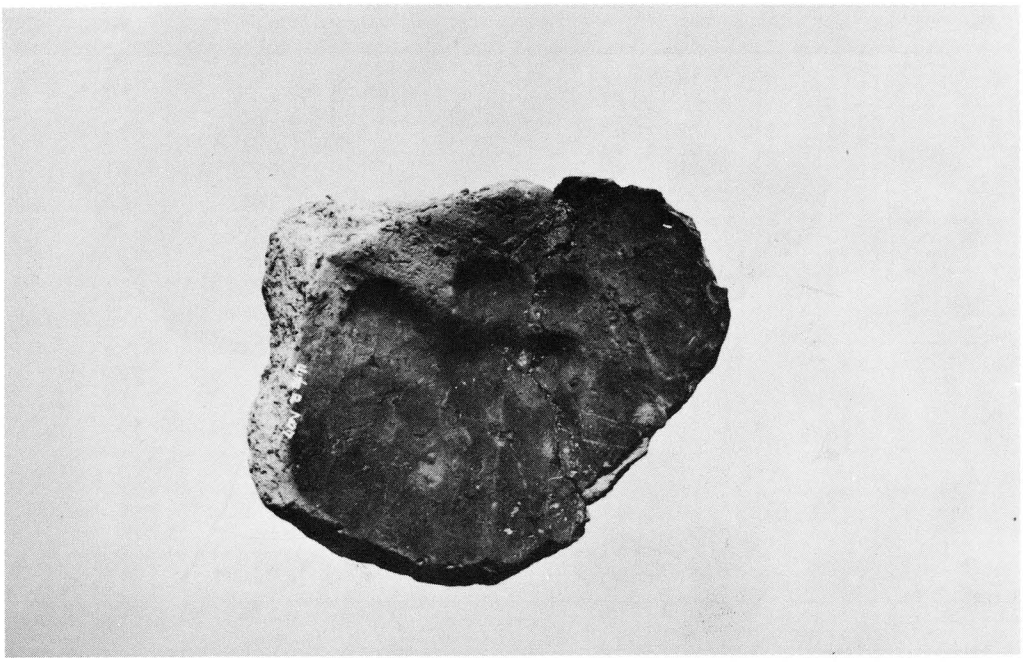




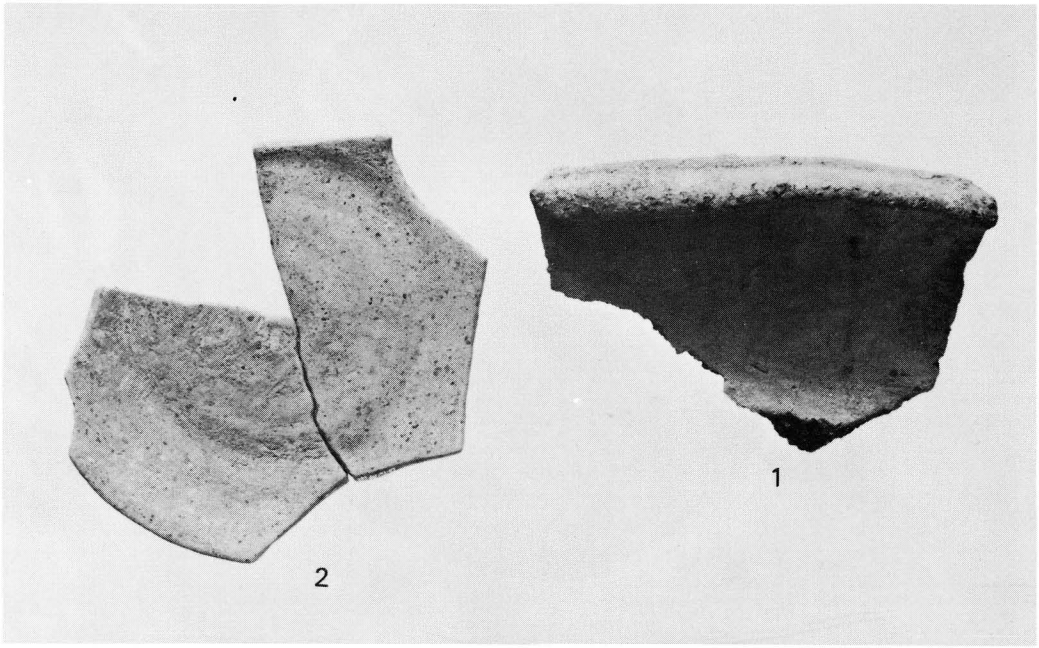
Bトレンチ出土の太形蛤刃石斧（右端）、砥石（$\frac{1}{2}$大）

PL. 16

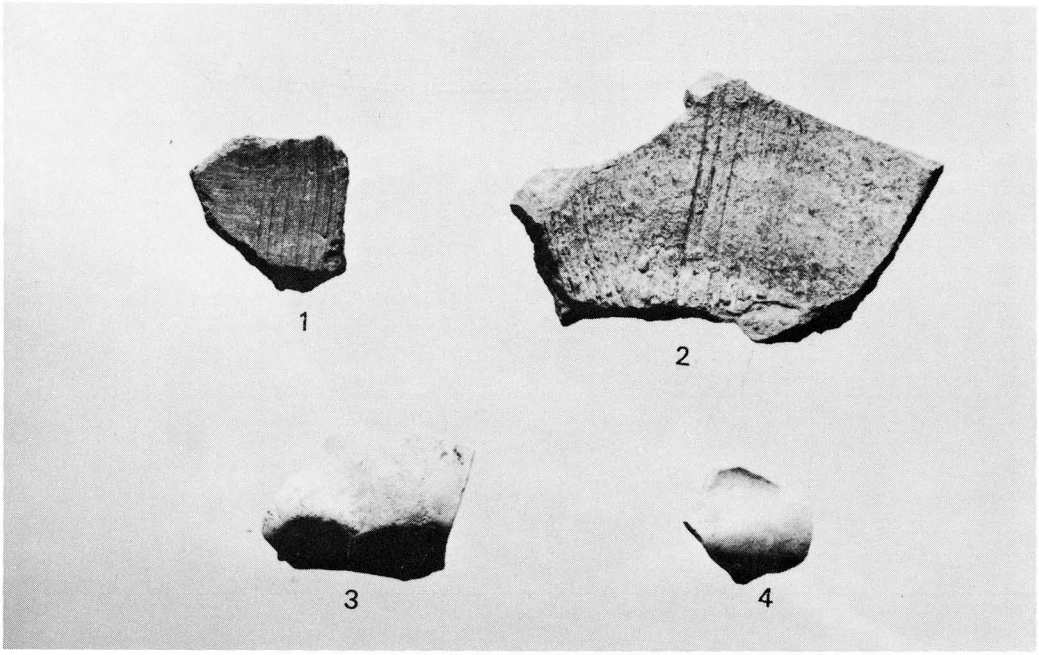




Bトレンチ出土の木葉底
及び指頭圧痕土器底部（大篠式）（$\frac{1}{2}$大）

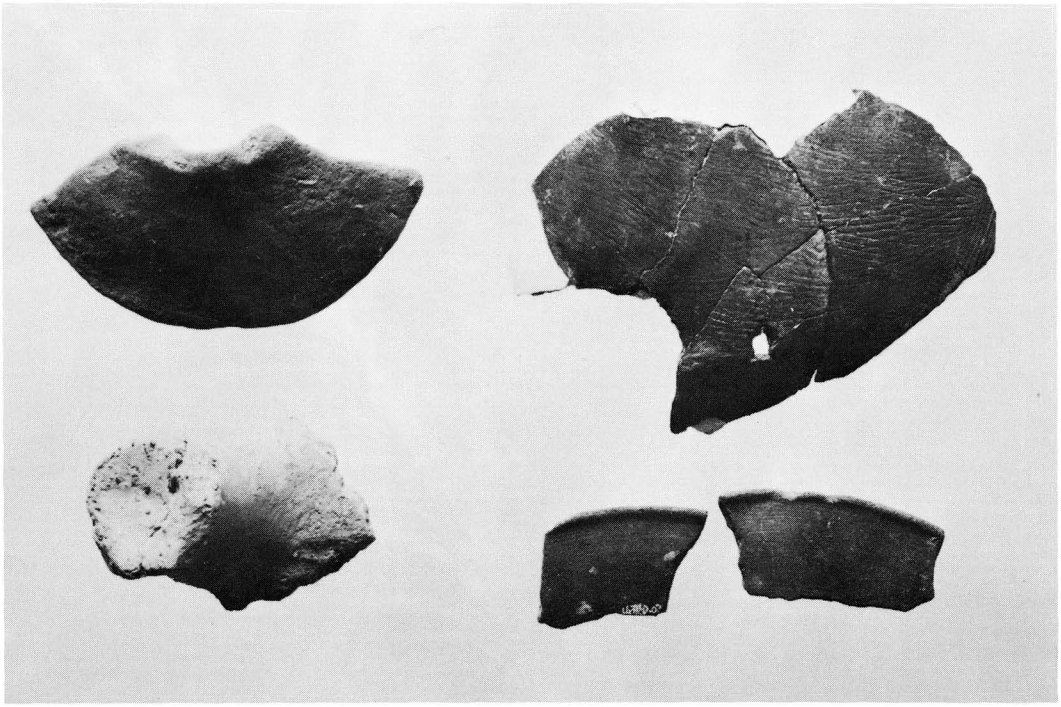


Cトレンチ出土の龍河洞式土器片(1)及び土師器杯



伏見人形片（3、4）及び備前擂鉢片（1、2）

PL. 18



Cトレンチ出土の馬場末式土器片（½大）

山根遺跡の発掘調査報告書

昭和56年３月31日発行

発行　春野町教育委員会